
しゅーしょくぶ！

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しゅーしょくぶ！

【Nコード】

N0640Z

【作者名】

ゲキガンガー

【あらすじ】

大卒内定率が三割を切る時代。高校生の時から就職活動をするのが普通の時代になっていた。

そんな中、極度のあがり症の高校生、深谷佑介は、片思いの相手、河合英梨がコンビニで働いている事から、お近づきになりたいとコンビニのアルバイトを志望する。そして、コンビニの面接を受けるのだが。練習で受けたコンビニもあえなく落ちる。

そんな中、学校で『修職部』という、部活を見つける。

佑介はその部を訪れるのだが――。

前代未聞かはわからないけど、就職活動ラブコメディ。

実的な知識や、失敗談、成功談とかも、盛り込めたらいいなー、
というのが作者の希望。

しゅーしょくぶ！ ？（前書き）

かなりマニアックなネタというか。

就職活動×ラブコメ。

という、割と奇抜なネタですので、人選ぶと思いますが、もし読まれた方がいれば感想など書いて頂ければ嬉しいです。

ただし、修正は完結してからに、基本的にします。

コンスタンスに書いて、何とか完結させていきたいです。

しゅーしょくぶ！ ？

しゅーしょくぶ！ 正しい就職活動の始め方
作ゲキガンガー

履歴書。

氏名。 ふかやゆうすけ 深谷佑介

住所。 × × ×。

電話番号。 × × ×。

経歴。

2005年生。

2010年。 ○ ○ 小学校入学。

2016年。 ○ ○ ○ 中学入学。

2016年。 ○ ○ ○ 高校入学。

職歴なし。

特技。 空気を読む事。

部活動。 所属なし。

長所。 わかりません。 短所。 極度のあがり症なところです。

主なアピールポイント。

今までは何不自由なく生きてきましたが、これから社会に出て行く事を考えて、御社でアルバイトとして働こうと思いました。 取り立てて取り柄のない人間ですが、精一杯頑張ろうと思います。

目の前にいるコンビニの店長。 頭の禿げた、髪の本が波平みたいに立っているおっさんが、俺の書いた履歴書に目を通してている。 既に心臓はバクバクと鼓動をしている。 体調がおかしい。 異の中に穴が空きそうだった。

まず、履歴書を思い返して、後悔したのは、部活動に入っていないかった事。 やはり、部活に入っていないのはマイナスポイントだろう

うか。まず、体力以上に社交性を疑われかねない。次に、写真をス
ピード写真で撮り、乱雑に貼り付けた。寝癖を直すのを忘れ、写真
にも、きっちりそれが反映されていた。

これは面接である。だが、別に、企業の面接とか、そういうわけ
ではなかった。これは、ただのコンビニのアルバイトの面接である。

「それで、君はなんでコンビニのバイトをしようと思ったの？」

面接官となっているコンビニの店長。サーク。Kの店長だった――
は聞いてきた。

「それは！ その！ えーっと！ その！ えーと！ そのですね
『その』と『えーっと』しか言っていなかった。やばい、緊張のあ
まり言葉が紡げない。

店長は溜息交じりに履歴書の挟まっているファイルを閉じた。

「面接の結果は後日電話で伝えます。採用だったら電話で伝えます
が、不採用だったら連絡しません」

「わ、わかりました！」

俺は背筋を異様な程伸ばして、そう言った。

電話は来なかった。結果は不採用に終わる。

深谷佑介。賞罰なし。中高大、とエスカレートで進む学校の高等
部二年生。部活動などの所属はなし。取り立てて特徴もなく、長所
もなし。欠点なのは極度のあがり症な事。本番の時、人と接する時、
極端にあがってしまうのだ。顔は紅潮し、言葉は詰まる。典型的な
コミュニケーション能力の欠如。いわゆるコミュ障とか言われる人
種だった。

こういう性格だから、あまり友達も多くない。当然のように彼女
もない。

趣味は読書――という事になっているが、深く聞かれてもそんなに
は答えられない。愛読者は坊ちゃんという事にしている。どんな内
容だったかはあまり覚えていない。

こんな俺でも、恋をする。恋をする資格は誰にでもあるはずだ。

そう、職業選択の自由と同じく、恋愛の自由も憲法で認められているはずだ。認められているのは婚姻だった気はするけど。

相手の名前は河合英梨。

明るい性格の、クラスのムードメーカー。彼女は、部活には入っていないが、運動神経が良いので、各部活から引つ張りだこの人気ものだ。部活に入っていないのは、アルバイトで忙しいからだそうだ。

そんな彼女はコンビニのアルバイトをしている。サーク。Kではない。ファミリ。マートだ。

クラスでは接点がない彼女だが、もし、同じバイトとして働ければ、急接近のチャンスになるかもしれない。きっと、話す機会も増えるだろう。普段はあがって言えない事も、彼女に言えるようになるかもしれない。

そんなさもしい感情を抱えて、俺はコンビニのアルバイトを志望した。

しかし、練習で受けたサーク。Kも、見事に不採用。

それも当然だった。今は大卒内定率が三割を切る大不況時代だ。

コンビニのアルバイトでも、十倍以上の競争率がある。

そんな中、俺みたいな奴が採用されるはずがない。

本番となるファミリ。マートの面接まで、あまり日は残されていないかった。

俺は溜息を吐く。

そんなある日の事だった。学校で一枚のビラを発見する。

『修職部』

という文字だった。

活動内容。自己分析、面接練習、グループディスカッションの対策、など、表面的な就職活動に対する対策だけでなく、本当の意味での、職を修める事を目的とする部活動。

修職？ 就職じゃなくて？

何と無く、その違いに興味を持った俺は、その部の名前が書いて

あるところを訪れる事にした。

しゅーしょくぶ！？（前書き）

とりあえずコンスタンスに投下していきます。一日、一シーンくらいずつ。

しゅーしょくぶ！ ？

「失礼します」

コンコン、と二回ノックした末に、ドアを開け、部屋に入る。

「あれ……誰もいない？」

ある意味、ほっと胸を撫で下ろす。ドアをノックするだけで緊張したのだ。人に会うとなるともつと緊張する。それじゃダメなのはわかっているのだが。

部屋に入っても反応はなかった。

中には校長室の机みたいな机。

そして、なぜかクローゼットがあった。

ここは部室のはずなのだが、誰かの私室のようになっていた。

「なんだろうこれは？」

僕は好奇心に負けて、クローゼットを開ける。中には何着ものリクルートスーツ。女性用のものだが、綺麗に並んでいた。

クローゼットの下は、普通の箆笥みたいになっていた。

何と無く開けてしまう。

中にあつたのは、小さく包まれた、ハンカチのようなものだった。何と無く、紫色の包を手取る。

ほろり、と、包が解けた。

「これって……」

パンツだった。勿論女性用の下着のパンツ。

「——随分と大胆な下着泥棒だな」

びくつ、として振り返ると、ドアの手前には一人の女子生徒が立っていた。僕がその女子生徒を、女子生徒だと判断出来たのは、灰色のブレザーの制服と、チェックのスカートを穿いていたからだ。大人びた雰囲気、内側にカールさせたような、大人びた髪型。身長も高く、ポロポーションも抜群だった。

そのままリクルートスーツを着ていたら、やり手のビジネスウー

マんだと認識していたかもしれない。理知的な双眸をしているので、眼鏡でもかけたら、個人指導でもして欲しくなる、女教師になりそうだった。

「これは！ 違うんです！ これは！」

何が違うのかは説明できなかったが、僕は両手をぶんぶん振って、言い訳をした。

「パンツを握ったままで反論されても説得力がないが——まあいい」溜息を吐きつつ、女生徒は切り出した。

「恐らく——というよりは間違いなくだが、君は修職部に入りきたのだろう？」

「え？ はい。そうです」

僕は一応、落ち着きを取り戻しつつある。

「自己紹介が遅れたな。私は中川唯と言う。これが名刺だ」

「はあ……」

名刺にも受け取り方があるらしいのだが、僕はよくわからなかった。とりあえず、片手で受け取るのは失礼そうなので、両手で受け取っておいた。

人材コンサルタント業修職部講師。

なががわゆい

中川結衣

名刺の下には、電話番号とメールアドレスが書いてある。個人情報_の為に秘匿するが。

「それで、君の名はなんという？」

「その……深谷佑介です」

「そうか……良い名だ。それで、話をする前にして欲しい事があるのだが——とりあえず」

中川さんは、じとーとした目で僕を見る。

「手に持っているパンツを置いて貰えないか？」

しゅーしょくぶ！ ？（前書き）

一日一回更新が目標。とりあえず、コンスタンスに書き続けます。

しゅーしょくぶ！ ？

この部屋には、来客用にソファも用意されていた。そこに座り、お茶も振る舞われる事になる。

「それで、君はどうして我が部を訪れたのだ？」

中川さんはお茶をすすりつつ、そう言った。いざ面と向かうと、中川さんは美人だし、思わず緊張してしまう。

「その！ 自分は、あがり症でして、面接の時にそれを克服しようと思つた次第であります」

しまった。思わず、緊張し過ぎて、何か体育会系の後輩か、軍隊みたいな受け答えになってしまった。

「……そうか。君はあがり症なのか」

「はい！ 先日、コンビニのバイトの面接で落ちたばかりでして」
「なるほど……」

「ところで、先輩。修職とは一体どういう意味なのでしょう？」

「なんだ。そんな事か。説明しよう。修職とは、字の通り、修める職と書く。普通は就職と書く。だが、これは会社に入るまでの事だ。重要なのは、会社に入ってから、ひいては、職というものを修める事を目的とする、それが我が部のモットーだ。つまりは、入れるだけで終わらない、一生役立つものにしよう、という事だ」

「はあ……」

なんかよくわからないが、凄そうである。

「それで、深谷君。君は来年高三になるな」

「はい。そうですけど」

「就職活動をする気なのか？」

「僕は内部進学ですし、大学行くつもりですから、そんな先の事は後になって考えればいいかなーって」

「甘い！」

中川さんは叫ぶ。僕はびっくりして、思わずのけぞってしまふ。

「君は今の大卒内定率を知っているだろう？」

「そうですね。三割だとか」

「そう、三割。プロ野球のバッター並の打率だ。大学まで行っても三割しか就職できないのだ。そんな中、就職活動に新たな動きが出ている」

「新たな動き？」

「就職活動の超早期化。つまり、我々のような受験を必要とせずに進学する者を対象に、早期に優秀な学生を確保しようとする動きが出ている。2012年あたりに、ユニクロの会社、ファーストリテリングが、大学一年生から内定を出す動きを見せたのをきっかけに、各社がそれに便乗、今では、どの企業も、その流れに負けないようにと早期化を進める。そうなった上で、高校二年生から、高校三年生の期間に就職活動の時期がずれる、就職活動の超早期化が始まったのだ」

「はあ……」

それで先輩達はあせっていたわけか。今では、高校の授業でもリクルートスーツを着て受ける人も増え、高校側もそれを容認している。

「というわけで、君は逼迫した状況に置かれている、というわけだよ」

お茶を飲み欲し、机に置く中川さん。

「とりあえず——」

中川さんは身を乗り出してきた。そして、顔を物凄く近づけてくる。

「君のそのアピアランスはなんだ？」

「アピアランス？」

「身だしなみの事だ。身だしなみの。まず、この髭のソリ残し」
そう言っ、僕の顎を指差す。

「次に、このネクタイ。長さがバラバラじゃないか。長すぎる」
僕のネクタイは、ベルトより下に届く位長かった。

「それに、シャツも皺くちやだ。ちゃんとアイロンがけをしろ」

「……はは。人間、中身が重要じゃないかなって」

僕は見苦しい言い訳をする。

「その考えがまず甘い。良いか、人間というのはまず見た目で判断されるんだ。ある研究によると、第一印象は五割が視覚。三割が聴覚。一割が言葉遣い。後はその他。で、判断されるといふ。人間といふのは、まず見た目で人を判断するんだ。中身なんてものは、その場では判断できないからな。まず、見た目でその人と関わるかどうかが決まる。どんなに中身がよくても、関わりを持たれなかったら伝えようがないだろう」

「はあ……」

もつともな正論すぎて、僕は反論できなかった。

「そんなのでは、女の子にも嫌われる」

ギクツと。

ハートを矢で貫かれたような衝撃を受ける。

「ん？ どうした？」

「いえ、何でもないです」

「はーん。そういう事か」

したり顔で、何かを察した様子だった。

「君に恋人はいない。だが、想い人はいる、そんなところか」

「な！」

凶星だった。

「そして、君のような人間がアルバイトをしようなどという殊勝な考えを抱くのは、何か裏があると見るのが妥当だ。恐らく、そのバイト先に、君の想い人が勤めていると見るのが妥当であろう」

筒抜けだった。どれだけ洞察力に飛んだ人なのだろう。この中川さんという人は。

「……その通りです。僕はそのバイト先に好きな人がいて、その人に近づこうと——」

「中々に初々しくて良い。いいだろう。君の修職。私が面倒を見て

やろっ」

「本当ですか？」

「ああ。本当だ。だが、とりあえずは、うちに帰って、髭を添って、明日から出直してこい。私は無精な人間は嫌いなのだ」

しゅーしょくぶ！ ? (前書き)

一日。一シーン位ずつ更新。

とりあえず、書き続ける事と書き上げる事が重要です。どんな駄作であつても、前に進む原動力となるはずでしょう。多分ですけど。

しゅーしょくぶ！？

とりあえず、家に帰った僕は髭を剃り、鏡でネクタイをチェックする。時刻は夜である。時間帯を見計らう。大体、彼女はこの位の時間に働いている。

俺は自転車を漕いで、向かう。三十分程漕いだ先に、目当てのコンビニはあった。

ファミリ。マートだ。夜でも、燦々と輝いている。

外からこっそり中を覗く。
いた。

河合英梨。

明るくて天真爛漫。クラスのムードメーカーの女子。

俺にとってはまごう事なき天使だった。

一年の頃から同じクラスだけど、話した事はまだ数回だけだ。一方的な片想い、なんだろうな、やっぱり。

彼女は俺と同じく部活動に入っていないが、それには理由がある。彼女の家庭はそれほど裕福ではないらしく、私立高校、大学というのは、それなりにお金がかかる。

彼女は両親の負担を軽減すべく、アルバイトをしなければならぬ。何とも健気な事だった。

裕福な親の下で、ぬくぬくと育ってきた自分が恥ずかしい。

こっそり、外から中を見続けていても怪しまれるので、俺は意を決して中に入る。ただし、気づかれないように、レジからは死角になるように中に入る。そして、適当に漫画本を読みつつ、頃合いを見て、適当にスナック菓子を手にとって、レジへ向かった。

「いらっしやいませ！」

笑顔で言ってくる河合。いや、ここは英梨と呼ぼう。英梨。

セミロングの髪を後ろで纏めて、健康的で活動的な笑顔を浮かべている。

彼女の笑顔は、人を幸せにする笑顔だ。
なんというか、まさしく、天使だった。少なからず俺にとっては。
今は学校の制服ではなく、ファミリ。マートの制服を着ているが、
制服姿もそれはそれで、ものすごくキュートなのだ。

クラスのアイドルというわけでもない。彼女位可愛い人なら、鼻
屑目をしなければ、何人かはいるだろう。だけど、俺にとっては、
彼女が一番だった。

目の前にいるだけで、心臓が高鳴る。こういうのは理屈じゃない
だろう。恋に理由などいらない。

この場で告白出来るだけの度胸があればどれだけいい事だろう。
だが、今は緊張のあまり、喋る事すらままならない。視線を合す事
すら。

「あれ？ 深谷君」

流石に、クラスメイトの名前は憶えてくれたようだ。その事
にさえ、俺は感動を覚えざるを得ない。

「……河合か」

目を逸らしつつ言う。無愛想だが、仕方がない。目を合わせられ
ないのだ。彼女があまりにも眩しすぎて。

「よく来るね。このコンビニ」

「……まあ、まあな」

覚えられていた。流石に通い過ぎたか。

「家から近いの？ ここ」

「ああ。結構近い」

本当は、ここに来るまで自転車で三十分かかる。ここに来るまで、
何十件とコンビニを素通りしてきたのだ。

「へえー、そうなんだー」

「ところでさ。河合」

「ふえ？」

「ここってさ、まだバイトの募集とかしてるか？」

「してると思うけど、店長に聞いてみない事にはわからない」

「そうか。また電話してみる」

「うちで働くの？ 深谷君」

「ああ。うちから近いし（本当は遠いけど）。俺も何かバイトとか始めようと思って」

「そうなんだ。もし一緒に働く事になったら、一緒に頑張ろうね」

英梨は笑顔で言った。

うおー。

その笑顔だけで、ご飯が何倍も食べそうな気分だった。

英梨は手早く会計を済ませてくれて、レジ袋にスナック菓子を入れてくれた。あまり長居をするわけにもいかない、他の客の迷惑にもなるし。その日は大人しく帰宅した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0640z/>

しゅーしょくぶ！

2011年12月3日14時52分発行